

193 大聖堂の祭壇に描かれた日本人（2023 年 9 月 12 日）

フランス北部のリールにあるノートルダム＝ド＝ラ＝トレイユ大聖堂を訪れたとき、大聖堂内にあるサクレ＝クール＝ド＝ジェズ礼拝堂（写真右）で珍しいものを見つけました。祭壇の中央部に横長のモザイクがあり、右側には着物姿の四人の人物が描かれています（拡大図は右下）。大聖堂の解説によると、四大陸と四つの世代を代表する人物と、その背景にはその大陸で育つ植物が描かれ、神が全世界を創造されたことを表現しているとされています。また、モザイクの下辺には、ラテン語で《 Omnes gentes venient et adorabunt coram te, Rex gloriae, Christe 》（「全世界が栄光の王である主の下に来て、主の前にひれ伏す」という意味。）とあります。右から、笠をかぶった老人の男性、大人の女性、少年、大人の男性と背景には竹が描かれ、四人の人物は日本人で、アジア大陸を表していると考えられます。私はこの絵を見て、「信徒発見」という歴史的な事実を思い出しました。



1549 年、イエズス会のフランシスコ・ザビエルによって、日本に初めてキリスト教が伝えられました。キリスト教の布教とともに神社や寺院を破壊する事件が続いたことから、宣教師に対する弾圧が始まりました。そして、江戸幕府（1603-1868）は禁教令を發布して、キリスト教の宣教を禁止しました。江戸幕府は、寺譜制度を設けて全ての人はいずれかの寺に属することを義務付け、キリスト教の信徒（キリシタン）は棄教することが求められました。しかし、中には密かに信仰を守り続けたキリシタンがいました。彼らは、「隠れキリシタン」と呼ばれ、村の役人をカムフラージュするために、神道の儀式のように毎朝祭壇に炊いたご飯と酒をお供えし、仏様である観音様の像を聖母マリア像に見立てたマリア観音を拝み、オラショと呼ばれた古い祈祷書を仏教のお経のように唱えて、信仰を継承していました。

1858 年に日仏修好通商条約が締結された後、パリ外国宣教会の宣教師のベル

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

ナール・プチジャン神父（1829-1884）は、1864 年に長崎に赴きました。長崎の外国人居留地に住むフランス人のための教会建築が許可され、1865 年に大浦天主堂が完成しました。プチジャン神父は、日本人にも教会を開放し、自由に見学できるようにしました。なぜなら、プチジャン神父は、16 世紀末からキリスト教弾圧が続いた日本でも、密かに信仰を持ち続けている人がいるのではないかという期待を持っていたからです。

1865 年のある日、大浦天主堂を訪れた数名の女性が、「私たちもあなたと同じ信仰を持っています。聖マリア像はどこにありますか。」と神父に尋ねました。天主堂に姿を見せたのは、「隠れキリシタン」でした。プチジャン神父による「信徒発見」はヨーロッパに伝えられ、大きなニュースとなりました。その後、キリシタンだと名乗る者が次々と現れ、プチジャン神父は彼らにカトリック信仰を教えました。大浦天主堂（写真右）は 1953 年に日本の国宝に指定され、この天主堂を含む「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、2018 年にユネスコ世界文化遺産に登録されました。



リール大聖堂の年表によると、大聖堂は 1854 年から建設が始まり、1908 年に礼拝堂が完成しました。大聖堂の建設中に、信徒発見のニュースがフランスに伝えられたと考えられます。サクレ=クール=ド=ジェズ礼拝堂を作った人が、信徒発見のニュースを聞いてこれらの日本人を描いたという証拠はありません。しかし、イエス・キリストに向かって拝む着物姿の人々の姿は、信徒発見によって信仰を取り戻した信仰者の姿に重なって見えました。